随想　子供の時には…

～過去は郷愁と共に思うべきもの～

㈱ＰＰＱＣ研究所　加藤　宏光

《スイスのロビンソン》という本がある。著者が小学生高学年の頃に大好きだった《家族ロビンソン》という本のオリジナルである。

ロビンソン・クルーソーという冒険読み物（ダニエル・デフォー著、一七一九年）を初めて読んだのは、小学一年生だったと記憶している。挿し絵にあった荒れ狂う波がいかにも恐ろしく、その年の海水浴デビューでは、三〇～四〇㌢ほどの波が立てる波頭が恐ろしくてしばらく海に入れなかった。

家族ロビンソンという少年物語に触れたのは、著者が大阪へ転宅して二年ほど過ぎた小学六年生頃であり、家族ロビンソンの物語は、かつて読んだロビンソン・クルーソーとはまったく趣が異なり、恐ろしさや寂しさとはほど遠く、少年だった著者は心を躍らせて何度も読み返したものであった。

宣教のために移住しようとした神父一家が激しい嵐に巻き込まれ、難破した船にとり残された。他の船員、乗客は皆救命ボートで脱出したが、その折一家はボートに乗りはぐれた。

船は幸運にして沈没せず、一家は乗りはぐれたために助かる。

船は漂流の上、ある島に座礁。やっとたどり着いたこの島には、生活に役立つあらゆる《植物》《動物》が生殖していた。

家族は語り手である神父とその妻をはじめ、長男のフリッツ（一六歳）、次男のエルンスト（一四歳）、三男・ジャック（一二歳）、末っ子のフランツ（一〇歳）の総勢六人。子供達はそれぞれ個性豊かである。

登場する動物を上げてみると、野ガモ・水牛・山犬・鷲・ニシンの大群・ハト・大亀・アナコンダ・カピバラ・ダチョウ・セイウチ・インド狼・象・イノシシ・ライオン等であり、植物は、マニオク（根からデンプンが採れる）、米、マングローブ、麻、綿等生活するのに必要十分な、さまざまなものがあり、またアコヤガイからは真珠を取り、洞窟では水晶を見つける。

語り手である父親は勇敢で博識、また知識を知恵に繋げて生活をゼロから豊かなモノに仕上げて行く。母親も優しく、また愛情豊かで料理や裁縫を得意とするだけでなく糸繰り・機織りまでやってのける。

万能な父親・母親のリードで、六人の子供達は個性を活かしながら、成長していくのである。理科の中でも生物、とくに動物が好きでたまらなかった著者にとってさまざまな動物が登場し、それらの動物を時に狩猟で食糧とする、また時には家畜のように飼いならし、生活を豊かにする。そのノウハウが細かく説明されているのであるから、筆者にとってはたまらない。

ダチョウを飼いならし乗用にする。野生のミツバチを巣箱に取り入れて、ハチミツを採取する。鷲を飼いならして、狩猟に使う。

筆者の世代には、所有者の分から野山に自由に踏み入り、山腹やこんもりした林の中に《仲間の巣》を作って遊んだ。山腹に小さな砦を模して作り、また、林には笹を刈って広場を作り、屋根をかけて小屋のようなものを作ったものである。その中で、木の上に《巣》を架けるのは、難しいからこその、われわれの夢であった。この小説で、大きな木に《最初の家を構え、大樹に形成されたウロに螺旋の階段を架ける》と書かれている。少年にとって、これほどの夢はなかろう。

ちなみに、筆者が小学生から中学生までの少年時代に憧れたのは、象を飼うこと（少年冒険小説で子象に乗って冒険する物語に感化された。当時、子象一頭が八〇万円であった。また、それから何年かしてかの有名なムツゴロウ先生が《クル病の象を動物園から引き取って面倒を見ている》という記事を週刊誌で読み、感動したことがある）。また、中学一～二年生の頃、自然発生のミツバチ・分蜂を見た。この折にミツバチの飼育法という書物を読み、ミツバチを飼育することに、大いに興味を持ったことがある。

この物語では、著者の少年時代に思い描いた理想郷が舞台なのである。

その後何年もして、同じ《家族ロビンソン》というテレビアニメが作られたが、登場人物の中で主人公のように少女が取り扱われていたこと等、物語が大きく修正されていたことで少なからず失望し、見ることもなかった。

五〇歳を越えた大人になってからも、家族ロビンソン物語に郷愁を覚え探してみたが、残念ながら子供の頃のモノは処分されてしまっていたし、再発行されているものは先に上げたストーリーが修正されたものばかりで、著者が読みふけった書物には出会えなかった。

つい最近になって、オークションで家族ロビンソンの原典である《スイスのロビンソン》が出品されていた。

早速入手して読んだ。あれから六五年過ぎた今読み返すと、感じられるものが随分異なる。

まず物語の背景をなぞってみる。

この本はあるロシアの船長の報告に基づくものとされる。この船長が、ニューギニア島からあまり遠くない肥沃な島に上陸すると、そこに父と母と四人の息子からなる一家族が住んでいた。その父親の話では、自分はスイスの牧師で一七九八年の革命ですべてを失い、海外伝道師になろうとした。タヒチの原住民に布教するために船出した。そこで大暴風雨に遭遇したという。その後多数の人によって書き繋がれ、完成したのは一八一四年であった。この書物はスイスのモノとしては《ハイジ》と共に最もよく読まれているものの一つである。宇多五郎訳のこの本は一九五一年初版で、著者の入手したものは第六版で二〇一六年に発行されていた。

初版に忠実で、旧仮名遣いであり、また言葉遣いも戦後間もない時代を彷彿とさせる（子供達は父親・母親に丁寧語で話す等）。

時代が変わってしまい、それに慣らされた著者にとって、改めて読み直したこの物語はかつて胸を躍らせたような興奮をもたらさない。

見つけた動物は《狩猟の対象》《そんなに都合よく多種類な動植物が島に生殖するか!?》《それほど万能なヒトがいるのか!?》。そして一〇年後、捜索部隊に発見された時にこの神父は、自分の住んだこの島を《スイスの新しい植民地》にすることを宣言するのである。

読む側の年齢や時代背景が異なる故に、考えれば当たり前のことではあるが、改めて過去は郷愁と共に思うべきものである、と実感した。